

精神疾患の現存在と精神分析の現存在

総田 純次(大阪府立大学)

精神病理学 (Psychopathologie) が精神医学の中で独自の領域を確立したのにはヤスパースの貢献が大であろう。英米では psychopathology という言葉が単に異常心理, 病理性といった程度の意味しか持っていないのに対し, ドイツやフランス, その影響を強く受けた日本などでは, 独自の方法論に基づく Disziplin という意味を獲得している。ヤスパースの「精神病理学総論」¹は, いわばカントの批判に似た作業であり, 精神病理学を理解という方法に基づいて基礎づけるとともに, その領域の確定を意図している。哲学との峻別に関しては, とりわけ初版 (1913) で厳格であり, 「精神病理学における先入見」の節において哲学的思弁の混入を二番目の先入見として挙げている。

「精神病理学の哲学化」が特に顕著となったのは, ハイデガーの『存在と時間』(1927)²における現存在の分析を受けた現象学的精神病理学あるいは人間学的精神病理学という潮流においてであろう。とくに「現存在分析学 (Daseinsanalyse)」という名で人間学的精神病理学を構築したビンズワンガー, L. が著名であるが, より洗練された応用例として, 中村雄二郎が『共通感覚論』³で援用しているブランケンブルク, W. の『自然な自明性の喪失』(1968)⁴を挙げることができるだろう。しかし, 特定の精神病にその「基本障害 (Grundstörung)」を想定することに対してヤスパースは, 「分裂」, 「意識の崩壊」, 「内心失調」, 「統覚の弱化」, 「心的能動性の不全」などの「これらの言葉でもって結局, 「何か共通した理解できないことがある」という同じことを言っているだけである」(1948) と述べている⁵。つまり色々な本質的な心的機能を持ち出してきたとしても, 結局は「精神病は精神病である」と言っているに等しく, 同語反復に陥っているというのである。

ここで初期のハイデガーの目論見の一つが, 人間の存在は事物のように本質によって規定されるものではないということであり, 「現存在」という術語

もそのために選ばれたということを感じると、むしろハイデガーから学ぶべきは、「精神病を人間の在り方として捉えるという人間学的な視点に立つ限り、精神病を本質指標によって規定することはできない」ということであろう。ヤスパースは、精神病理学にとっての哲学の第一義的価値は、精神病理学の問いの立て方を問うという批判的な効用であると言う(1948)。「統合失調症の本質は何か」といった問いの立て方がそもそも意味のある問いであるのかがまず問われるべきことなのである。

さて精神医学や精神病理学、あるいは精神療法に対して特異な位置を占めるものに精神分析がある。フロイト以来、精神分析が各種の精神疾患のメカニズムを提唱し、力動精神医学という名称もある以上、精神分析は精神医学の一領域、精神病理学の一翼とも見なされている。また一般には精神分析は、ユング心理学、アドラー心理学、来談者中心療法などと並ぶ、精神療法の一形態と見なされている。あるいは精神分析は20世紀に成立した現代思想の一種とも数えられている。しかし精神分析家の自己理解に従えば、精神分析は医学とは違った論理に従っているし、精神分析は精神療法からも区別されるべきものである。ラカン派の分析家に二年間分析を受けた経験のある私の友人は、「ラカンも、かなり特殊とはいえ一人の精神分析家である」と述べており、精神分析という個別の経験と遊離した思想でないことを強調している⁶。精神分析とは何かと問われて分析家は結局、「精神分析は精神分析である」と答える⁷。ここでも再び同語反復が現れている。

精神病とは何かという問いに対する、「精神病は精神病である」。精神分析とは何かという問いに対する、「精神分析は精神分析である」。この2つの同語反復はそれぞれ何を意味しているのだろうか。

「精神病は精神病である」とは、精神病をこれこれといった特質で規定することはできず、それが「現にある通りのもの(Dasein)」として受け取るということを示している。精神病を現にある通りのものとして受け取るということには、精神病を脳の異常として探究することも、社会の側の疎外の産物として告発することも、近世的コギトの偶像の破壊者として賞賛することも、自分には関係のない出来事として通り過ぎることも含まれている。そうした総体として精神病は現にあり、私たちは自覚していなくとも既にそれに関与

してしまっている⁸。

「精神分析は精神分析である」という、精神分析家の同語反復的答えはどうか。ハーバーマスは、ガダマーとの解釈学論争においてイデオロギー批判のモデルとして精神分析を用いたが⁹、同時にフロイトの理論化に対して「科学主義的自己誤解」という批判を加えている。これに対してリクールは、フロイトの理論に見られる準物理学的用語法を、患者の側の心的過程の物象化という病理性を反映したものとして擁護している¹⁰。つまりフロイトらの精神分析の理論—とりわけエネルギー論などのメタサイコロジー—に当てはまるが一に見られる物象化について、一方では19世紀後半の科学主義の先入見が、他方では病理的過程への相即が言われているのである。この双方に一理あろう。精神分析の伝統には、患者との精神分析経験の集積のみならず、催眠からの発展、中流階級を対象とした外来診療、19世紀の科学主義、分派や抗争といった出来事も属している。こうした伝統を継承する制度の中心に教育分析が位置している。こうした事情に鑑みると、「精神分析は精神分析である」という分析家の言葉は、精神分析の伝統の流れに身を置いていることの意識の表明のように響く。精神分析もまた歴史的な事実 (Faktum) なのである。

それでは精神疾患と精神分析という二つの歴史的事実はどのような関係があるのだろうか。当日は、とくに精神分析における分析経験と理論の関係を軸に、この点を論じたい。

註

1. Jaspers, K.: *Allgemeine Psychopathologie*. 1. Auf. 1913; 4. Auf. 1948.
2. Heidegger, M.: *Sein und Zeit*. Tübingen 1927.
3. 中村雄二郎『共通感覚論』岩波現代選書 1979.
4. Blankenburg, W.: *Verlust der natürlichen Selbstverständlichkeit*. Stuttgart 1971.
5. クルト・シュナイダーも自身の「第一級症状」は、プロイラーによる統合失調症の基本障害という仮説とは異なり、現象学的記述であるとしている。
6. 小川豊昭・南淳三、第6章「精神分析の実践」、新宮一成・鈴木国文・小川豊昭編『精神分析学を学ぶ人のために』京都 2004.
7. 日本精神分析学会長藤山直樹の2012年の日本精神神経学会学術総会シンポジウムでのフロアからの質問に対する答え。

8. この文脈で、フーコーの「狂気の考古学」の第一義的意義は、狂気と理性の関係以前に、精神病は実体ではなく、歴史的事実であることを示した点にある。
9. Habermas, J.: *Erkenntnis und Interesse*. Frankfurt a.M. 1968.
10. Ricoeur, P.: The question of proof in Freud's psychoanalytic writings. *J. American Psychoanalytic Association* 25, 1977. pp.835-871.